

五周年感謝祭を振り返って

新潟市歴史博物館ボランティア

伊豆田 芳宏

平成二十年十月十三日(日)午前十時「感謝祭の開会を宣言します！」甘粕館長の声が雲ひとつない紺碧の空に響き渡り、新潟市歴史博物館みなとびあ開館五周年感謝祭が幕開けしました。

「この建物は明治二十年十月、関税業務を行う役所、新潟税関として竣工したものです。港町新潟を象徴する建物です。眼下に流れる信濃川を眺めながら当時の面影を偲んでみてください。」国の重要文化財・旧新潟税関庁舎塔屋では、参観に訪れた市民にボランティアが丁寧に解説しています。

敷地内では感謝祭に参加してくれた音楽家による透き通った歌声が流れる中、敷地内ガイドツアーを行っているボランティアは、多数の市民に小型メガホンで解説しています。「昭和二年に建造されました旧第四銀行住吉町支店です。この建物の特徴は厚重な石張りによる…」

本館体験の広場は、親子を中心として数多くの市民が集まり「これ、どう回すの?」「わりばし鉄砲って、どう作るの?」「飛んだ、飛んだ」などと体験



感謝祭 たいけんひろば

仕事をさせて貰って五年目、いろいろ新潟の人々からお世話を受けており、少しでも恩返しをしたいと気持ちから応募しました。十一月十八日、新潟市万代市民会館ホールでの最初の説明会に参加しま

ボランティアへの応募

ボランティアに質問したり、指導を受けたりと、賑やかなことこの上もない盛況です。一方、常設展示室に目を向けると、「信濃川・阿賀野川と二つの大河は新潟市から日本海に注いで…」、「このコーナーは縄文時代から弥生、古墳時代の…」、「長岡藩領だった新潟町は天保十四年、上知され幕府直轄領になり…」などと、常設展示室を数ポイントで分け、ボランティアが、ひっきりなしに訪れる市民に熱心に解説しています。私は、それぞれの持ち場で頑張っているボランティアの仲間を見ているうち、開館当時の状況を思い浮かべました。

ボランティアへの応募

平成十五年十月初め、地元新聞に「新潟市歴史博物館のボランティア募集」の記事が掲載されました。私は、ボランティアについての知識も経験も全くありませんでしたが、新潟で

したが、会場に入ってビックリ、ホールが一杯になるほど多くの人が集まっていたのです。

研修の開始

年が明けた十月十九日、第二回目の研修も、新潟市万代市民会館で行われました。二月以降は、新潟市歴史博物館で「体験の広場」「敷地内ガイド」それぞれの担当に分かれ、個別研修や実践研修を受けました。特に敷地内ガイドは、ポイント毎の解説資料が配布され、各自が工夫を凝らし、自分のものにしてようと必死で勉強をしていたようです。私も、自分なりにガイドする口語体の文に書き改め、何とか三十分以内で解説ができるように資料を作り変え、実践研修に備えました。しかし、講師の学芸員や研修仲間の前でいざ実技、となると、なかなか上手く解説ができずかなり悩んだものです。

自信を喪失?

中には資料を見ることなく、立板に水のごとく流暢なガイドをやる研修生がいて、私などは落ち込んだものです。この人は、地元テレビ局で開館直前の当館を紹介するニュースで、その見事なガイド振りを披露していました。このテレビを見た新潟県民は「みなと

発行や研修旅行等の話が舞い込んだのです。

世話人会の発足

これらの企画には多くのボランティアが参画してくれたため、お互いの顔が見え、言葉を交わし、ある程度の意思疎通ができるようになりました。顔が見えるようになること一部ボランティアの間から「ボランティアの中心なものが出来ないか。」との話が出てきました。そこで、有志が集まり熟慮した結果、平成十九年十二月、二十五名による任意のボランティアの集まり「世話人会」が発足したのです。

月例会の開催

やっと立ち上げた世話人会が長続きできるように、毎月第二水曜日を月例会日に定め、平成二十年二月から開催しています。この月例会は全ボランティアが対象です。また、ボランティア独自の行事を積極的に進め、新潟歴史探訪の企画、クイズラリーの開催と旧新潟税関庁舎塔屋案内、地元団体の祭典への協力、研修旅行の実施、ボランティアレターの発行などを行いました。

五周年感謝祭の開催

月例会やその他の場面で、開館五周年に対し何らかのアクションを起こすべき、との話が一部で囁かれたところ、館側からも同様の話があり、双方で検討し五周年記念イベントの開催を決定しました。



感謝祭 常設展示室

びあボランティアのレベルは相当高い」と思ったのではないだろうか。ということは、私もそう見られる可能性がある?不安な気持ちのままデビュー戦を迎えることになりました。

〇八名のみなどびあボランティアの誕生

開港当時の面影漂う信濃川左岸に完成した新潟市歴史博物館は、多くの新潟市民が待ち望む中、平成十六年三月二十七日に開館し、私もボランティアも開館と同時に誕生しました。説明会には二〇〇余名。研修会では二三名になり、最終的に二〇八名で新潟市歴史博物館みなとびあボランティアは発足しました。

不安と緊張の中でのデビュー戦

私のデビュー戦は開館一週間後の四月四日でした。それまで何回も現場に赴き自己訓練を積んでのデビュー戦でしたが、やはり極度の緊張と不安な状態で臨んだのです。

最初にガイドをしたのは、確か四、五名で来館してくれた六十年代前後の男女のグループでした。「ボランティアガイドの伊豆田といえます。これから敷地内をガイドさせていただきます。この建物は二代目新潟市役所庁

館側からは、みなとびあボランティアと新潟市歴史博物館共催で行いたいと、私どもボランティアにとって真に名誉な提案を頂きました。ヨチヨチ歩きから始まったボランティア活動も、何とか一人前に成りつくと感無量でした。「感謝祭の成功」と「事故は絶対起こさない」を合言葉に、それぞれの担当を決め責任者を中心となって何度も検討を重ねました。

地元各団体等からの協力を得る

博物館と同じ町内に住むボランティアの方の働きかけにより、地元の各団体の協力を得ることができました。当日、当館広場に屋台のテント村が出現し感謝祭を盛り上げていただきました。また、音楽イベント担当の責任者は人脈により、本格的なオペラ歌手、二胡エレクトーン奏者、コーラスグループ、にいがた樽砦、大正琴グループ、新潟民謡踊り、下駄総踊り響連等からの参加を得ることができました。

博物館とボランティア一丸となって

博物館職員・学芸員とボランティアが一丸となって活動を行いました。この日、午後四時の終了時間までの来館者数は実に六〇〇名に及び、事故もなく、皆さんに楽しんでいただきました。こうして感謝祭の幕を静かに閉じることができました。本当に感謝です。(いずた よしひろ)

舎の外観を模して建てられたものです。」と、ここまででははつきり覚えていますが、その後、新潟奉行所から新潟県庁舎、初代新潟市役所等の説明をしているうち、あれ程覚えた年号等をすっかり忘れ、頭の中が真っ白。後はどうしてガイドしたのか今もって分かりません。「レベルが高い?」「どこの騒ぎでなく、ただ、失敗したことだけは確実でした。その場を一旦離れ、信濃川のほとりで大きく深呼吸し、自分の資料を読み直し、頭を整理してから再度挑戦し、完璧ではありませんでした。何がガイドができ、ホッとしたことを憶えています。その苦い貴重な経験を今でも決して忘れないようにしています。

時の経過と共に湧き出る「こころ」

開館後の二、三ヵ月位は多くの市民が来館し、私も敷地内ガイドボランティアも活躍の場があり、充実した活動を行うことができました。しかし、時が経つにつれガイドを依頼する来館者も減り、空振りが続くことが多くなってきました。行動的なボランティアは待ちの姿勢ではなく、攻めの姿勢で訪れている人々に積極的に声をかけ敷地内ガイドを楽しんでいました。私のような引つ込み思案の者はどうしても「こころ」が出るようになります。つまり、せつかく来た「こころ」に、貴重な時間を割いている「こころ」に、「ガイドをやっている」に、「ボランティアの顔がわからない」に、「ボランティアの横の繋がりが全くない。」等々の話が出るようになりました。そうした中、ボランティア担当の学芸員からボランティア主導によるボランティアレターの

前にも書きましたが、私にとってボランティア